

Title	洪皓について
Author(s)	外山, 軍治
Citation	大阪外国語大学学報. 8 p.95-p.111
Issue Date	1960-04-01
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80170
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

洪 皓 に つ い て

外 山 軍 治

NOTES ON HUNG HAO

TOYAMA Gunji

Hung Hao 洪皓, who in 1129 A. D. was despatched by the Sung 宋 government to Chin 金 to negotiate for the return of the Emperor and ex-Emperor of Sung to their home country, was himself detained for fifteen years, and was finally allowed to go home as a result of the conclusion of peace between Chin and Sung.

Throughout the period of his detainment he lived at Ling Shan 冷山, the birth-place of the well-known Chin general Wan-yen Hsi-yin 完顔希尹, and served as instructor to the general's sons. It happened that, among the leading statesmen in Chin, the general was the most antagonistic to Sung, so that Premier Ch'in Kuei 秦檜, of Sung preferred in his peace negotiations to turn to General Dalan 撻懶, who was leader of the pacifist group in Chin. Now it fell to Ch'in Kuei's lot to swell the rank of detainees in Chin, along with the ex-Emperor and others, but later they were allowed to return to Sung, with the tacit understanding that Ch'in Kuei should work in concert with Dalan for expediting peace on either side of the border. Ch'in Kuei assumed the reign of government in Sung, and his efforts helped the conclusion of peace in 1142 A. D.

Hung Hao, on being repatriated, put forward his frank views on the peace issue, but the intimation of his knowledge of the relationship between Ch'in Kuei and Dalan resulted in his expulsion and exile to South China, where he passed his declining years in great adversity.

Ch'in Kuei secured premiership by dint of his knowledge of affairs in Chin. By contrast, Hung Hao suffered for his possession of similar knowledge, which excited Ch'in Kuei's hatred. A relieving feature, however, was that he had such brilliant sons as Hung Hua 洪适, Hung Shun 洪遵 and Hung Mai 洪邁, who not only because high officials in the Sung government, but established themselves as outstanding representatives of various phases of South Sung 南宋 culture.

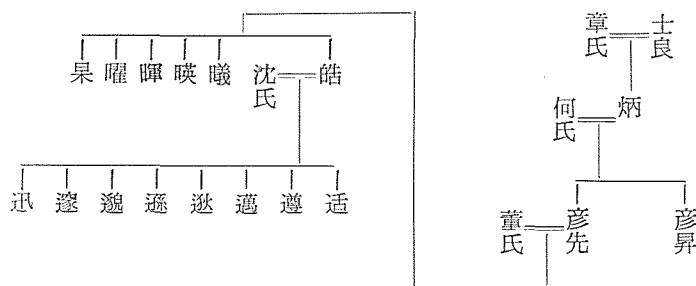
序

洪皓は12世紀の前半、南宋から金に使し、前後15年間抑留せられながら節を守った剛直の士として知られるが、适・遵・邁という当時稀れな俊秀の父としてもまた有名である。本篇の目的は、

この洪皓の伝記の概略を紹介することにある。かれの伝は『宋史』巻373にあり、さらに『洪忠宣公年譜』と題する、きわめて豊富な内容をもった年譜が『洪氏晦木齋叢書』の中に収められているから、これらによって事足りるではないか、という人があるかも知れないが、こゝでは、もう少し、かれの生きた時代を考えながら、かれの歩んだ途をふりかえてみたいと思うのである。

1

まづ洪皓の家系を調べることからとりかゝるとしよう。洪适の『盤洲文集』巻33「盤洲老人小伝」（盤洲老人は洪皓の長子洪适のこと）、同書巻74「先君述」（先君は洪皓のこと）その他によって整理するとこのようになる。



洪皓の家ではじめて官に仕えたのは、後述するように、伯父の彦昇である。彦昇の祖父、すなわち皓の曾祖の士良の事蹟まで幾らか判っているが、それ以前の所伝は明らかでない。ただ士良の先祖が、唐末或いは五代の頃に、安徽の徽州（歙州ともいった）から江西の北部、饒州の樂平に遷ったところから比較的はっきりしてくる。その地は、さらに詳しくいえば、樂平県の東70里で、巖前とも洪源とも（『盤洲老人小伝』）、また洪巖ともいった（『盤洲文集』所収「洪适行状」、「洪适神道碑」）。『盤洲老人小伝』には

洪族本居徽州。唐末避乱徙樂平之東七十里。曰巖前。曰洪源。凡九百余家。世世業耕桑。という。『読史方輿紀要』巻85江西3 樂平県の条に洪巖という項をあげ

県東北九十里。高聳百余丈。盤互四十余里。中有大（天？）井，桐木，風巖，冷水等数巖。

惟洪巖最著。山腰有石室。南北相通。其中雲氣泉声不絶。山下洪氏居之。又名洪源。

とある。樂平県からの距離において、「盤洲老人小伝」の記事と20里の相違があり、方位においても、「小伝」には東といい、『紀要』には東北といているが、同じ場処を記したものとみてよいであろう。饒州すなわち鄱陽の南において鄱陽湖に流入している鄱江の上流樂安河をさかのぼったところに樂平県があり、さらにそこから東に数十里さかのぼったところにこの洪源があったわけである。「先君述」によると

洪氏始居樂平之金山。

といているが、金山はこの洪巖の所在地である（『同治樂平県志』巻1 地理山川，金山郷の項）

洪皓の曾祖士良はこの地において耕桑に従っていたのであるが、この人がその2人の孫の教育に力を注いで家門を起そうと考えた。

自曾祖府君（すなわち士良）種徳重義。以氣節聞。子中大夫（炳のこと）蚤世。二孫幼。府君慨然思所以成立計。即絜諸城中。訪先生之賢教之。因占鄱陽（「先君述」）とあり、鄱陽移籍のことがみえている。ここにおいて、洪皓の父祖は鄱陽（すなわち饒州府）の人となった。士良の念願は叶って、2人の孫のうち、長孫の彦昇（皓の伯父）が宋の神宗の元豊乙丑（8年）に進士に合格した。彦昇が進士になったのは、士良の死後16年であったという（「盤洲老人小伝」）。

次孫の彦先、これが洪皓の父にあたる人である。この人は不遇に終わったらしいが、徽宗の政和5年（1115）皓が進士に合格して、いよいよ洪家の地位が固まったわけである。「盤洲老人小伝」には洪适の時代のこととして

給事中（すなわち彦昇）之後官者七。今一人存。忠宣（すなわち皓）之弟姪官者九。今兩人存。子孫曾孫官者二十六。今二十二人存。皆高門沢也。

と自負していることによっても、その家門繁栄の様子が知られるのである。

さて以上述べたところによってわかるように、洪皓の家は、皓の時代まではその当時としてはきわめて普通にみられる士大夫の家であったわけである。皓は哲宗の元祐3年（1088）彦先の長男として生れた。あざなは光弼。その名の皓については異説があり、その兄弟の名はみな日へんであるから、皓ではなくて皓であるという（『洪忠宣公年譜』宋哲宗元祐三年戊辰公生の条）。もっともな説と思うが、確実な傍証がみあたらないので、今通説に従って皓としておこう。

洪皓が進士に合格したのは徽宗の政和5年（1115）、28歳の時である。1115年といえば、女真族が北満洲に興り、金国を建てた年であり、後年かれはこの金に使して15年の抑留生活を送るのであるから奇しきめぐり合せというべきである。進士に合格した年に皓は沈氏と結婚した。常州無錫（江蘇）の人、朝散大夫沈復の女であり、太常博士沈松年の妹である（「先君述」「慈瑩石表」ともに『盤洲文集』所収）。この人は适・遵・邁という比類稀れな文人を生み、当時における優生家族をつくった人であるが、その家系については、詳しいことはわからない。『宋史』列伝によると、洪皓には、王黼も朱勔も囑目してこれと通婚しようとしたが、力辞したのだといっている。王・朱ともに、徽宗朝の寵臣で、のちに金軍来攻という国難を招いた責任者6名のうちに入れられて殺された人物である。

洪皓は、政和7年（1117）30歳で台州寧海県の主簿となり、のち宣和年間（1119—25）、秀州司録になった。秀州は今の浙江省嘉興県である。ここで建炎2年（1118）まで在任したが、その間にかれの仕えている宋朝は空前の不幸に見舞われた。さきに一言したように、洪皓が進士に合格

したのと同じ年に女真族は遼朝の圧制に反撥して北滿に金国を建てた。宋朝ではこの新興の金国に使を送り、宋金同盟して遼を夾攻することを議した。これは五代の後晉の時から遼の領土になっている長城の南側に沿ったいわゆる燕雲十六州の地方を奪回したいばかりに、考えついたことであったが、その結果は、宋は、凋落の遼の代りに新鋭の女真の威圧をうけることになった。宋は一旦、金の手によって遼の勢力を一掃した燕京（今の北京）以下6州の地の割與をうけたが、約に違つてこれに対する報酬の提供を怠つたために、間もなく、遼を滅して意気軒昂たる金軍の攻撃をうけ、ついに靖康の変と呼ばれる悲惨事を招くことになった。靖康2年（1127）、宋の国都東京開封府は陥れられ、上皇となった徽宗、皇帝欽宗以下后妃、皇族、宮女、官僚3千余人は金軍の手によってその本拠である満洲の地に連れ去られ、宋は一旦滅亡した。幸にして、金軍の宋都占領当時、開封城にいなかったため捕虜になることを免れた欽宗の弟、徽宗の第9子にあたる康王が南京応天府（河南省商丘県）で帝位について宋室を再興した。時に、建炎1年（1127）5月。これが高宗である。しかし応天府では金軍を防ぎえないと考え、10月には揚州（江蘇省江都県）に遷ったが、建炎3年（1129）2月、金軍の急追をうけて揚子江を南に越え、杭州（浙江省）を仮りの都とさだめた。

秀州在任中の洪皓は、高宗が杭州に遷る前年の建炎2年、父の彦先がなくなったので、その葬式を営むために饒州へ帰った。母の董氏は孫たちとともに秀州にとどまっていたという。翌年、洪皓は饒州から秀州へ帰る途中、杭州に立ち寄った。高宗皇帝が揚州から杭州へ遷って間もない頃であったが、この時杭州には明受の乱と呼ばれる事件が起っていた。それは御營前軍統制の苗傅と副統制の劉正彦のひき起した叛乱である。この兩人は、かれらの長官にあたり、武人の中で最も地位の高かった御營使兼樞密使王淵に対して不満を懷き、機会をねらって、王淵と高宗側近の宦官とを殺し、さらに高宗に退位をせまり、高宗の皇長子の魏国公という3歳の幼児を帝位をつかせた。この年3月のでき事である。明受というのはその時かれらが勝手に建てた年号である。叛軍の言い分は、欽宗は皇帝の身分のまゝで金に捕えられていったので、その留守中に帝位についた高宗皇帝は即位の名分が正しくないというのである。官軍側では蘇州に駐屯していた張浚が杭州以北の地に駐屯していた諸將と連絡して杭州にせまった。形勢不利とみてとった苗傅、劉正彦は杭州から逃げ出し、討伐軍が杭州に入つて4月には高宗が復位した。苗・劉らは間もなく捕殺せられた。この頃の情勢は『建炎以来繫年要録』などに詳しく記されている。洪皓が故郷の饒州からの帰途杭州を訪れたのはこの年4月というから、高宗が復位し、杭州の秩序が回復された頃であった。この時高宗は、一旦建康（今の南京）へ遷ろうとしたのであるが、洪皓は上疏してこれを諫めた。「先君述」によると、

今内難甫平。外敵方熾。若輕至建康。恐金人乘虛侵軼。宜遣近臣先往經營。庶事告辦。鳴鑾

未晩也。

といったのだとみえている。建康への移蹕はすでに決定していたので、これを思いとどまらさせることはできなかったが、しかしこの時の上疏によって洪皓は高宗皇帝にその存在を知られたので、5月には秀州から召し出されて謁見を賜わり、大金通問使の白羽の矢を立てられたのである。これが今後のかれの運命をかえてしまった。

2

宋室の中興をめざして立った高宗は、侵入してくる金軍を防禦する一方、金に使者を送って徽宗・欽宗らの返還をねがうということを取りかえした。金の前進根拠地である西京大同府（山西省）には宗室の勇将、左副元帥粘罕（漢名は宗翰）が、燕京には太祖阿骨打の皇子、右副元帥幹离不（漢名は宗望）が駐屯して南方を威圧していた。この両者は先年宋都を攻陥し、徽宗・欽宗以下の人々を金国に拉し去った人々であったが、このうち大同駐屯の粘罕の方が有力であったので、高宗は主として粘罕のところへ使節を派遣して、徽宗・欽宗ほか金に捕虜になった人々の返還をねがったのである。第1回の遣使は建炎1年（1127）7月、傅雱・馬識遠を大金通問使副として金の西京大同府へ派遣し、10月には王倫・朱弁を派遣した。ついで建炎2年2月、劉誨・王昉を大金軍前通問使副という名目で、これまた大同へ送った。さらに5月には、宇文虚中・楊可輔を金国祈請使副、11月には魏行可・郭元邁を大金軍前通問使副として河北、また建炎3年1月、李鄴・宋彦通及び周望・呉得休らの2組の使節を派遣した。これについて洪皓が大金通問使に選ばれたわけである。なお、その副使は龔璿であった。

南宋初、対金遣使一覽表				
使名	正副使	任命の時期	行先	備考
大金通問使	傅雱 馬識遠	建炎1.6戊寅 (7月出発)	西京大同府	
同上	王倫 朱弁	建炎1.10辛卯 (11月出発)	同上	王倫、朱弁抑留さる。王倫は紹興2年、朱弁は同12年帰朝。
大金軍前通問使	劉誨 王昉	建炎2.2	同上	建炎3.1 帰朝
金国祈請使	宇文虚中 楊可輔	建炎2.5	同上	宇文虚中、抑留され、金に仕う。楊可輔、建炎3.1帰朝
大金軍前通問使	魏行可 郭元邁	建炎2.11	河北	
	李鄴 宋彦通	建炎3.1	河東（おそらく大同）	

	周 望 呉得休	同 上	河 北	
大金通問使	洪 皓 龔 璚	建炎3.5	西京大同府	洪皓抑留せられ紹興12年帰朝。龔璚は齊に仕えた。
大金軍前使	崔 縱 郭元明	建炎3.7	同 上	
同 上	杜時亮 宋汝為	建炎3.8	同 上	金軍の再下を恐れ和を議せんとした。
大金軍前通問使	張 邵 楊 憲	建炎3.9		撻懶に会う。張邵は燕京に抑留せられ紹興12年帰朝。
大金軍前致書使	孫 楮 卞信臣	建炎3.11		要録109, 紹興7年1月辛丑条には卞信臣をト世臣に作る
大金奉表使兼軍前通問使	潘致堯 高公綏	紹興2.9	西京大同府	紹興3年5月帰朝。
大金軍前奉表通問使	韓肖忠 胡松年	紹興3.6	同 上	紹興3年11月帰朝。
同 上	章 誼 孫 近	紹興4.1	同 上	徽宗、欽宗及び河南の地の返還を乞う。
大金軍前通問使	魏良臣 王 綏	紹興4.9	同 上	金の南伐軍に妨げられ紹興4年12月帰朝。
大金軍前通問奉表使	何 薺 范寧之	紹興5.5	同 上	紹興7年1月帰朝

洪皓が派遣を命ぜられたのは建炎3年5月であるが、かれの前に派遣された使人のうちで、その時まで帰国したのは、建炎2年2月に派遣された劉誨・王昉と、同年5月宇文虚中の副使として派遣された楊可輔だけで、他は何れも金国に抑留せられている。

ここで洪皓以前の使臣選定の事情を考えると、何かの失策があったために否応なしにこれをひきうけなければならなかったか、或いは、自ら失策を償って黒星を消そうと考えてひきうけたか、そのどちらかに属するようである。まづ傅雱については

清江人。以職罪不得改官。故求出使（『建炎以來繫年要録』巻5, 建炎1.5 戊戌条）

とある。王倫は応募して使命をうけたものである。劉誨については

初開封人劉廷者。嘗從張懷素倡左道於真州。懷素敗。廷即國門外亡去。至是名誨。上書自薦。

願応募使金国。召對以為宣教郎（『要録巻13, 建炎2.2 丁丑条）

とある。

宇文虚中は金に使した宋臣の中でもっとも高官で、靖康1年すでに簽書樞密院事にまで進んでいた。ところが第1回の金軍の開封攻撃後、金と議して三鎮割譲を許した軟弱外交を弾劾せられ、安化軍節度副使に貶され、韶州（広西省曲江県）に居住せしめられていた。高宗が金に使すべきものを募ったので、宇文虚中は進んでこれに応じ、資政殿大学士となって派遣せられたのである

（『宋史』巻371、宇文虚中伝、『三朝北盟会編』巻214、宇文虚中行状）かれの場合、徽宗・欽宗の返還を祈請するということを使名としたので、特に大官を選んだのであったが、何れにしても、自ら進んで金国に使し、自分の運命をひらこうとしたことにちがいないようである。

洪皓の場合はどうであったか。洪皓自ら遣使を求めたのだとする説がある。もっとも、これは洪皓が金から帰ってきてのち、宰相秦檜ににくまれ、檜の派の侍御史李文会が皓を弾劾する理由の1つとしてあげられているもので、果してどれほど真相を伝えているかははっきりしない。それによると、

皓頃事朱勔之壻。夤縁改官。以該討論。乃求奉使（『建炎以来繫年要録』巻150、紹興13.9甲子条）

とある。朱勔の壻というのは、皓が秀州司録事在官当時の知州周審言のことではあるまいか。「先君述」によると、皓が進士に合格した時、朱勔はその娘の壻にしようと希望したがこれを拒絶したので、勔は皓と同年の進士周審言を壻にした。審言は出世が早く、妙なめぐりあわせで秀州の長官になったといっている。

李文会のいうところは、洪皓は自分の地位を進めるために朱勔という国賊の壻に請託した。そのことが問題となったので、その不評を消すために遣使を求めたのだというのである。果してこの弾劾文にいう通りの事実があったかどうかは判らないが、皓にも、遣使をひきうけなければならぬような事情はあったのであろう。一旦命令が出た以上、これを拒絶することは許されない。

『要録』巻6、建炎1年6月辛酉条によると、徽猷閣直学士、提举江州太平觀であった徐秉哲に、資政殿学士を仮し、開封尹を領せしめて大金通問使に充てたが、辞退してうけなかったのを、昭信軍節度副使を責授し、梅州（広東省梅県）に安置せしめられている。洪皓の場合においても、もしも辞退すれば同じような処分が下されたことであろう。

かくて洪皓は使命を拝した。その時長子の适はやうやく13歳。遵は10歳、邁は7歳、逖以下はみな襁褓にくるまっていた。

3

洪皓は建炎3年閏8月に太原に到着し、ここに留ること1年ののち、翌4年12月に雲中（大同）へ移った。ちょうどこの年の9月、金は宋の降臣劉豫を冊立して斉国皇帝とし、山東、河南をその領域として与えた。この地方を、不慣れな女真人の手で統治するよりも、漢人の支配に委せ、そして南方宋に対する前衛国の機能を発揮させるためである。その翌年にはさらに、金軍の手で経略した陝西地方を領土を加与するのであるが、これらのことは、すべて粘罕の計画によって進められた。劉豫はもと宋の知済南府であったが、金の宗室の將軍撻懶（完顔昌）に攻囲せられて

降伏した人物である。

従って劉豫と撻懶との関係は密接であったが、劉豫冊立の計画は、撻懶の意に反して粘罕の手によって進められた。粘罕が撻懶を出しぬいて功を奪ったわけである。撻懶が、粘罕と劉豫に悪感情をもったことはいうまでもなかろう。劉豫の斉国をバック・アップしようとする粘罕は、宋から使した洪皓に対し、劉豫に仕えることを強要した。しかし洪皓はこれを峻拒した。粘罕は憤慨して洪皓を冷山に流遞した。流遞というのは宋で編竄というのと同じで、流しものという意味である。冷山は金の將軍陳王悟室、即ち完顔希尹の聚落である。粘罕の腹心で、元帥右監軍であった。この冷山の所在について明確に記したものはないが、現に完顔希尹神道碑が存在している吉林省舒蘭県小城子に比定して誤りないと考える。洪皓は雲中より2ヶ月の行程の後冷山に達した。その時、「先君述」によると仮吏沈珍、隸卒邱徳・党超・張福・柯辛の5人を隨行したという。洪皓の『鄱陽集』拾遺に収められた「使金上母書」には、仮使沈珍のことを使臣、隸卒邱徳以下のことを兵士といっているから、沈珍はある程度教養のある人物であったらしく、邱徳以下は洪皓の道中を警護する役目の兵士であったものとみえる。「先君述」によると、冷山での生活について

地苦寒。四月草始生。八月而雪。土廬不滿百。皆陳王悟室聚落。悟室誨其八子。或一年不給衣食。盛夏至衣犂布。番課四隸採薪它山。嘗久雪。薪尽。至乞馬矢煨麵而食。

といっている。犂布は粗布のこと、馬矢は馬糞である。5人の臣従をかかえての生活はけっして楽ではなかったであろう。この5人のうち張福・柯辛の2人が死亡したことを「使金上母書」は伝えているのである。洪皓は希尹に命ぜられてその8子に学問を教えたというが、「使金上母書」によると「教其子昭武」となっている。昭武というのは、昭武大將軍把菴、すなわち希尹の長子である。当時女真人の上流階級の間には漸く中国的教養を尊ぶ風潮が生れていたが、とくに希尹は学問に熱心で、洪皓という一かどの教養人を得てその子たちに教えさせたのである。希尹の神道碑にも「性尤喜文墨。征伐所獲儒士。必禮接之。訪以古今成敗。諸孫幼学。聚之環堵中。罄圖寶僅能過飲食。先生晨夕教授。其義方如此」といっているのは、希尹の学問熱心を記したものであるが、洪皓はこの点、充分にその課せられた任務に忠実だったようである。『鄱陽集』巻1には、洪皓が彦清に贈った詩をのせ、彦清が陳王悟室の長子であること、そしてその弟に彦深というもののあったことを註記しているが、同集巻1「次彦深韻」によれば、彦清と彦深のほか、彦亨、彦隆があったことが知られる。彦清は長子であるというから、さきに述べた昭武大將軍把菴のことであると思われるが、あとの彦亨、彦隆、彦深も、すべて希尹すなわち悟室の子どもの漢名で、このようにその各の一字を同じうしたところに、中国の士大夫の教養を憧憬、模倣していることが感ぜられる。

さて、このようにして、洪皓は、紹興10年（金天眷3年、1140）燕京（今の北京）に徙るまで冷山で10年間の歳月を送った。そして燕京に徙った翌々年の紹興12年に金宋の和議が成立し、その翌13年8月、やっと帰朝したわけで、前後15年間、金に抑留せられたことになる。この間における洪家の状態を数少ない記録によって考えてみよう。

洪皓の家族は、かれの任地の秀州でその留守宅をまもることになった。金に使するとその家のもの4人が修職郎に補せられる。これは従8位にあたる文階官で、それに相応する待遇が与えられた。皓の6子のうち、長子の适（当時13歳）だけがその恩典にあづかり、他の3つは皓の弟姪に与えられた。そしてさらに、皓の希望がいれられて、皓の弟の曄は、服喪期間中であるにもかかわらず、秀州判官に起用せられた。さて『盤洲文集』巻77、墓誌4慈瑩石表に

它姪有子。太夫人（洪皓の夫人）恩之有過於己出者。一姪甚嘗。以太夫人鍾愛其女，意小不憚。故笞辱之以撓。太夫人啼声一聞則蹙然見顔面。必俟其嬉戲復常乃快。終不少譴其母。盖其仁厚出天資。行於自然。未嘗有所彊勉。数数然也。

といっている。洪皓の家庭にも、士大夫の家によくみられるように妻妾同居したこと、そして正夫人が甚だおもしろいやりのある立派な女性であったので、その留守宅に風波を立てなかったことなどが知られるのである。その文章に続いて「生理既薄。所仰以給者唯先君奉入。衣服飲食取財足。至諸子買書。或捐錢数万不靳」といっている。その留守宅の収入といえば、洪皓の俸給だけであったという。

紹興2年（1132）9月、建炎1年金に使した王倫が金から帰って来た。これは金の粘罕將軍が宋の国内の様子をさぐるために帰らせたものである。王倫は高宗皇帝に対して、洪皓が金に使して節をまげないということを言上したので、高宗は早速、秀州の役所に命じてその家属を存問せしめ、銀絹各100匹を賜わり、适は未だ冠せずして潭州南嶽廟を監するを得た（『要録』巻72紹興4年正月戊辰）潭州南嶽は今湖南省の衡山であろう。また紹興7年にも、他の使人の家属と同様に錢を賜っている。『要録』巻109、紹興7年正月辛丑条によると

賜修武郎朱弁家湖州田五頃。弁初副王倫北使。十年未歸。倫為之請。於是諸郡存恤奉使未還魏行可・郭元邁^{建炎二年十二月}、洪皓・龔璚^{建炎三年五月}、崔縱・郭元明^{建炎三年七月}、杜時亮・宋汝為^{建炎三年七月}、張邵・楊憲^{建炎三年九月}、孫悟・卜世臣^{建炎三年十二月}家属各賜錢三百緡。

とみえている。このようなことを考えると、留守宅の生活はまず心配ない程度であつたろうと思われる。

4

洪皓が冷山に徙されてからの10数年間に、宋金関係に新しい局面の転回がみられた。洪皓が冷

山に徙されたのは、粘罕の強要にもかかわらず、劉豫の齊国に仕えなかったからであった。粘罕は自らの援立した齊国に、前衛国としての機能を発揮しようと考えて、金・齊連合軍による宋への進入を企てた。天会10年（宋紹興2）の計画は実現しなかったが、同12年から13年にかけては事実淮南への進入を敢行した。しかしこれは太宗の死によって挫折している。一方、このような粘罕の計画の裏をかくような工作が行われていた。それは、撻懶による、宋との和平交渉の機会をとらえようとする努力である。撻懶は、宋の徽宗とともに捕虜として金に連れてきていた御史中丞秦檜の用うべきことを知り、ひそかに宋に帰らせ、これと連携して和平工作を促進しようと考えた。秦檜は、ともに捕虜となっていた夫人の王氏を伴い、建炎4年（1130）10月、脱歸したといって宋に帰った。かれは海路、その当時の行在であった紹興府へ赴いて高宗皇帝に拜謁し、礼部侍郎に敍せられ、金国の内情に通じた唯一人の帰朝者として、また難局打開に関する見通しをもった人物として、高宗の信任をえた。秦檜は帰国後1年もたたない紹興1年（1131）8月、一度宰相（尚書右僕射）になったが、まだその勢力は充分でなく、反対派から弾劾をうけて翌年8月に宰相をやめ、提挙江州太平觀となって中央を去った。その理由は、専ら和議を唱えて国家回復の遠図をはばみ、そればかりか党派をつくって権力をほしいままにしているということにある。撻懶と秦檜との連携はまだ効を奏するに至らなかった。秦檜がやめるとその一派は続々と罷免せられた。王倫が帰ってきたのは翌月の9月であった。

秦檜が再び中央政府に帰ったのは、紹興7年1月、徽宗の訃報が宋に伝えられてからである。金に捕えられていた徽宗が五国城の配所で54歳の生涯をおえたのは、紹興5年（1135）4月であるが、金ではわざと通知をおくらせていた。宋廷に知らされたのはそれから1年半のちのことである。宋の高宗は驚き悲しみ、ただちに喪を發したが、訃報の伝えられたその日、知紹興府になっていた秦檜を樞密使に任じた。

高宗は建炎1年（1127）以来、金に対して徽宗・欽宗両帝の返還を要求しつづけてきた。しかし、その内心には、必しも両帝の帰国を好まない気持がしだいに大きなものになってきた。最初のうちは、両帝の帰還を心から願っていたかも知れないが、かれの即位の名分が正しくないということが問題になって、明受の乱が起ってから、両帝の帰国を望まなくなったようである。欽宗は皇帝のまま金に捕えられている。欽宗の帰国が実現すれば、あるいは高宗は帝位を返上しなければならぬであろう。徽宗が帰国した場合についても同じような心配があったのである。それでは何故高宗が、自分心とは裏はらな、両帝返還の要求をつづけたかということ、それは、両帝の返還要求をしなければ、子弟としての道に背くという非難をうけるかも知れないからであったと考えられる。それで、とうてい実現しないことは計算にいれて、なおかつ要求をつづけてきたのである。ところが、父の徽宗は金でなくなった。事情はここで一変したわけである。高宗が秦檜

を、訃報を知った即日召して樞密使に任命したのは、この新しい情勢に対応するためであったとみるべきである。その日高宗は秦檜の帰宅をゆるさず密議をこらしたことが『要録』巻108にみえている。ここで高宗が秦檜の輔佐によって考え出したのは、徽宗の梓宮と高宗の生母章氏の返還を要求することによって対金和平交渉を展開するということであった。以後高宗は梓宮と生母の返還を強調した。しかし、これに反して欽宗の返還にはしだいに熱をいれなくなった。ものと言わない父の遺骸と、生母の返還をねがうということで、十分に孝の道にははづれないのである。その使節には、先年金から帰ってきていた王倫を充て、この年4月に派遣した。

当時、宋・金両国の間に介在していた劉豫の齊国は、もはや辛うじて命脈を保つに過ぎない状態であった。金天会13年（1135、宋紹興5）3月、その支持者であった粘罕が、金国上層部の勢力関係の変化によって兵権を失い、その翌々年、すなわち、徽宗の訃報が宋に伝えられた年の7月、失意のうちに死し、そしてこの年11月には、齊国はいよいよ廃止せられるに至った。前衛国としての機能を発揮できないからというのがその理由であった。そこで浮び上ったのが和平論者の撻懶で、対宋政策を左右しう立場におかれた。かれは左副元帥として祁州（河北省安国県）に駐って、旧齊国領土の動静をみまもっていた。宋では、齊国廃止より4カ月のちの紹興8年（1138）3月、秦檜を再び宰相（尚書右僕射）の地位につけた。これは、金における撻懶勢力の擡頭に応ずるためとみてよい。秦檜はかれの上席にあった左僕射の趙鼎をやめさせることに成功して、政府において勢力を固めた。かれは宰相に返り咲きしてから、その死に至る17年間政権の座にあったわけである。

金国部内においても、撻懶の活躍がめざましくなった。金帝熙宗はまだ若年でおさえがきかなかった。太宗の帝位を継ぐことを期待しながら果さなかった太宗の長子蒲盧虎（漢名は宗磐）など、熙宗を擁立することに力のあった太祖の庶長子幹本（漢名は宗幹）その他の側近派に反対する勢力が強くなっていたが、撻懶は、蒲盧虎らの反対派の人々と結んで、齊国の領土を宋に返還することを定めたのである。そして紹興8年（1138、金天眷1）、金使張通古は詔諭江南使と称して宋の臨安府に列着した。宋廷においては、宋帝は金帝に対して臣礼をとるべきである、という金側の要求に従うことをいさぎよしとせず、秦檜、王倫斬るべしという胡銓の封事が行われたりなどしているが、和議を熱望する高宗の信任と、趙鼎の退官によって自由に敏腕を振うことができるようになっていた秦檜は、反対意見をおさえ、宋帝の体面をけがさないようにし、しかも、宋帝に臣礼をとらせようとする金帝の体面をも立てるようにその場をとりなし、張通古のもたらした金の国書（金からいえば封冊である）を無事に金使からうけとって、ここに和議は成立した。同年12月である。宋では、その翌年1月、金との間を何回か往復した王倫を使節として派遣し、迎奉梓宮、奉還兩宮使（兩宮とは欽宗と章後のこと。金では梓宮と章后とを帰すことは承認し

ているようであるが、欽宗のことにはふれていない。そのことは宋ではよく知っていたながら、奉還両宮使と称しているところに、宋廷の苦心が察せられる）・交割地界使として派遣し、歳貢として銀25万両、絹25万疋を金に提供することを承諾した。歳貢に関するとりきめは金側の史料にはみえないが、実際は、和議交渉のはじめから、撻懶と宋使王倫との間に話がついていたのであると考えられる。このようにして、劉豫の斉国の領土のうち、黄河新河道以南の河南の地方と陝西地方とは金から宋に返還せられた。この年3月である。

しかしながら、斉国の旧領土が宋に返還されると、金室内部における情勢ががらりと変った。反対派におしまくられて宋との和議に同意せざるをえなかった熙宗側近派は、洪皓のパトロンであり、さきに粘罕の腹心として活躍した完顔希尹と結び、まづ蒲盧虎以下の太宗の諸子を殺し、ついで和議の立役者である撻懶を売国奴として殺した。希尹は粘罕とともに兵権を奪われ、天会13年(1135)元帥左監軍より尚書左丞相兼侍中となって、西京大同府から金の首都上京会寧府(今のハルビン東南の阿城県)に移り、粘罕の没落とともに不遇な状態にあったが、さらに天眷1年(1138)7月には、左丞相の地位から興中尹(興中府は今遼寧省朝陽県)に転出させられた。希尹は宋との和議に賛成しなかったため、撻懶、蒲盧虎らに排斥せられたからである。しかし、斉国旧領土が宋に返され、和議が成立したのち、熙宗側近派は撻懶、蒲盧虎らに反撃を加えるために、天眷2年(1139)1月、完顔希尹を興中府から中央に呼び返して再び尚書左丞相兼侍中とした。熙宗側近派が断行した太宗の諸子、撻懶殺害には、希尹の協力に負う所が少なかった。撻懶や蒲盧虎らを除くことに成功した金は、撻懶らの提唱によって成立した和議を否定する立場をとり、翌天眷3年(1140)5月、兵を出して河南・陝西地方の奪回に着手した。熙宗は南征軍の士気を鼓舞する目的もあって、9月燕京に行幸したが、完顔希尹とその諸子もそれに先立って燕京に出た。洪皓は希尹に随行を命ぜられ、4月23日に冷山を発った。洪皓が燕京に入ったのは8月18日のことと「先君述」にみえている。同書には、希尹は宋が希尹の望むような条件を承諾するようになれば、洪皓を帰国させて商量させるつもりでいたらしい。ところが実際は、宋が歳貢、誓表の提出などをふくむ金の要求に応じなかったため、武力行動に出るに至ったのであるといっている。

5

燕京へ出た洪皓は、そこで完顔希尹父子の没落という事件に会った。希尹は熙宗側近派の人々に、撻懶や太宗諸子を除くことに利用されたが、こゝに至って側近派のために陥れられたのである。熙宗ににくまれたことと、その当時都元帥として南征軍を統率していた太祖阿骨打の皇子の1人、兀朮(漢名は宗弼)と仲が悪くなったと思われる記事が、『完顔希尹神道碑』にみえ

ている。

天眷中車駕幸燕。帝當服袞冕乘玉輅以入。后欲共載。王不可曰。法駕所以示禮四方。在禮無帝與后同輅者。后藏怒。未有以發。會都元帥宗弼與王因酒有隙。方辭還軍中。帝夜遣使召至。諭之曰。希尹嘗有姦狀。又召明肅。諭以王罪。明肅諫曰。希尹自太祖朝立功。且援立陛下。亦與有力。願加聖念。帝怒甚。至拔劍斥之。明旦詔并其二子賜死。諸孫獲宥。

明肅というのは、太祖の庶長子幹本（漢名は宗幹）である。9月22日、希尹父子が殺された。そしてその時、希尹と同じく粘罕の下でその華北経略を補佐し、尚書右丞相になっていた蕭慶の父子も捕えられて殺されている。これで粘罕派勢力の一掃がなされたわけである。『金史』本紀、列伝や希尹の神道碑などによると、希尹とその2子、すなわち昭武大將軍把搭、符宝郎漫帶だといっているが、この年洪皓が母に上った書には、「悟室（希尹）父子八人」とみえている。どちらが真実を伝えているのか、判らない。希尹父子が処刑されたにもかかわらず、洪皓が免れたのは、かれが希尹に反対して何度も殺されかけたことがあったのを、兀朮が知っていたからだ。「先君述」にはいっている。希尹が殺されたので、洪皓は倚託する所を失ったが、この前後にかけて、かれを金朝の官職につかせようとする働きかけがつづけられた。同じく金に抑留されていた宇文虚中が金に仕えることとなり、光祿大夫・翰林学士兼太常卿・修国史となり、金国の礼儀を評定したのであるが、この虚中が洪皓を金の官職につけさせようとしきりに金帝に推薦した。それで金側では手をかえ品をかえ、洪皓に金の官職を与えようとしたが、皓の方でも策略をめぐらし、とうとう拒否しつづけた。

河南・陝西に攻めこんだ金軍は比較的短い期間に戦果をあげた。部分的には宋軍の振ったところもあった。宋の紹興10年（1140、金天眷3）6月、宋将劉錡が今の安徽省阜陽県近くの順昌で金の將軍兀朮の軍を大破したことなどもその一つの例である。洪皓はこの順昌の戦のことを宋廷に密奏し、金人がこの敗戦でふるえ上って恐れ、燕京にある珍器、重宝を悉く北方へ移したと、しかし宋軍が早くひきあげたので、これに乗じて攻勢に出る機会を失ったことを指摘し、宋の当局者の軟弱を残念がっている（「先君述」）。韓世忠、張俊、岳飛以下の諸将は各地で相当の戦果をあげていたが、秦檜は、戦功を誇っているこれら軍閥諸将を抑圧しなければ金との和議を成立させる見込みがないと考え、順昌の戦捷の伝わって間もない6月に、高宗を動かし、諸将の返還を命じたのである。そして、諸将の間の不和を利用し、まづ張俊を買収することによって成功した。張俊は和議に賛成し、まづ自己所管の兵馬を朝廷に返上することを申出で、政府の方針に迎合した。韓世忠、岳飛もこれに従わざるをえなくなり、軍閥兵力の中央軍改編は案外順調に行われた。そして、反対勢力を封じた秦檜は、いよいよ金との間の和議交渉を進めることとなる。そして、金の皇統2年、宋の紹興12年（1142）、宋帝は金帝に対して臣礼をとり、歳貢銀絹各々25万

を提供し、淮水・大散関を結ぶ一線を国境として和議が成立した。そして徽宗の梓宮と韋后とは宋に返され、両国は平和な国交に入った。和議締結の功労者秦檜は、高宗の絶大な信任をうけ、紹興25年（1155）に没するまでひきつづいて宰相の位にあり、反対勢力を中央から一掃して権勢をほしいままにした。かれは高宗を葉籠中のものとし、高宗も秦檜に対しては、はれものにさわるような態度で終始したらしい。

欽宗の帰国を希望しなかった高宗の内心を秦檜は知りつくしていた。高宗も秦檜には頭があがらなかったのである。

6

洪皓が帰国することができたのはもちろん講和の結果ではあるが、おもてむきは、皇統2年（1142）2月、金の皇子濟安が生れたので大赦を行い、それでこの年8月、帰国を許されたというところになっている。いよいよ帰国させてもらうようになってからも、何度もその計画がかわり、危くひきとめられようとしたことも、「先君述」その他にみえている。洪皓を帰したくなかった理由は、金国の内情を宋に知られたくないというところにあったと思う。このほか、朱弁、張邵らも帰国を許された。張邵は建炎3年（1129）、濰州（山東省濰県）に至って擡榼に抑留せられ、燕京の僧寺に拘せられていた（宋史巻373張邵伝）。朱弁は同じ年、王倫の副使として金の西京大同府へ行き、粘罕のために拘せられていたのである。

洪皓が帰朝を許されたのは宋紹興13年、金皇統3年（1143）6月であり、8月に帰国した。建炎3年（1129）に出発してから15年。56歳になっている。その間、留守宅では紹興8年（1138）、夫人沈氏がなくなっている。留守宅をよくまもり、賢夫人の誉れをえたこの人は、ついに夫君の帰国を待たないで逝った。しかし、洪家には不幸なことばかりがつづいたわけではない。長子の适と次子の遵とが、皓の帰朝の前年に、そろって博学宏詞科に合格したのである。これは科挙とは別に、人材を採用するという目的で施行する試験である。しかも遵の方は第一番の成績で、進士出身を賜わり、秘書省正字に除せられた。これは非常な拔擢だといわれた。适の方は第3番の成績で、勅令所刪定官となっている。

洪皓が高宗に謁すると、高宗は大いにその忠を賞め、内庫の金幣、鞍馬、黄金3百兩、帛5百匹などを賜った。翌日には、さきに金から帰った韋太后にも謁見をゆるされた。15年間の辛苦もやっとむくいられた感があった。ところが、かれは宰相秦檜に会って、思ったところを齒に衣をきせずに行ったために、すっかりその感情を害してしまったのである。「先君述」によると

見宰相秦檜。肆言無所避。彌三日不休。曰。張丞相虜所尊憚。及不得用。錢塘蠹蹕。而景靈太廟極土木之工。示無中原耶。語侵秦皆類此。秦語适曰。尊公信有忠節。得上眷。但官職如

読書。速則易終而無味。要如黃鐘大呂乃可。

といっている。秦檜と洪皓とは同年の進士ではあるが、今や檜は和議を成立させて権勢ならぶものなき有様である。この檜に、張丞相すなわち張浚が金人におそられているのに、これを用いないことを非難し、臨安府は仮りの都であるのに、景靈宮、太廟が結構を極めていて、これは中原を無視することになる、など、まことに遠慮しないで思いのままにいつてのけた。秦檜が機嫌をわるくしたのは無理のないところであろう。かくて、洪皓は徽猷閣直学士に進められ、提挙万寿觀兼樞直学士院となった。これはきわめて薄い取り扱いといわなければならない。ここまではまだよかったが、はやくも9月甲子（11日）には、洪皓を中央においては必ず問題を生ずるであろうという理由で、知饒州として転出させた。

秦檜が洪皓を嫌悪するようになった理由はいくつかあった。その1つに、紹興13年9月、金が趙彬ら30人の家属のひき渡しを要求したとき、宋が依々としてこれに従った軟弱ぶりを攻撃した件がある。趙彬は涇原統制張中彦の部将で、建炎4年（1130）金に降り、幾度か宋とも戦ったのち、紹興1年7月には宋に帰している。陝西転運使の地位を与えられ、10年4月には兵部侍郎に任ぜられている（『宋史』巻26, 29）。その後、金・宋和議成立にあたり、河南・陝西の士人で宋に投じたものの返還を要求したが、このとき彬も他の人々とともに金にひき渡されたものであろう。宋が金の要求通りにその家属をひき渡そうとしたので、洪皓はつぎのようにいつて反対した。

昔晉韓起謁環於鄭。鄭小国也。能引諠不与。虜既限淮。官属皆吳人。留不遣。蓋慮知其虚奉情偽也。彼方困於蒙兀。姑示強以試中国。若遽從之。彼將謂秦無人而輕我矣（「先君述」）

金がその当時蒙兀すなわち蒙古部の侵入に苦しめられていたことは事実であった。あわてて金のいう通りにしたならば、侮りをうけるぞ、という洪皓の言が秦檜を不愉快にさせた。洪皓は3日ののちにも上疏して「返さなければ和議がくずれるというならば、欽宗と皇族とを帰せばわたしてやろうといえよ」（「先君述」）といった。欽宗の返還ということは、もはやタブーとなっていたであろうのに、微妙な事情も察知しないで思うところにいつてのけた。こゝに洪皓の真正直な面目が躍如としているが、これはいかにも拙いことにふれたものだと思う。今1つは、この方が本当に秦檜を怒らせたのだと思うが、洪皓は秦檜がこれにふれることを極度にいやがっていることをいつたのである。『要録』巻150、紹興13年9月甲子条によると、つぎのようにいつている。初め秦檜は金の完顔昌の軍中にいた。昌は宋の楚州（安徽省淮安県）を攻めて降することができなかったのに、檜に命じ降伏をすすめる檄を草せしめた。錫納というものが軍中にいてその時のことを知っているのだが、洪皓は秦檜と金国のことを話した時、貴下は錫納のことをおぼえていますか、別れる時によろしくいつてくれとたのまれました、といったので、秦檜は顔色をかえた、と。完顔昌は撻懶のことであり、秦檜が撻懶との默契のもとに帰国できたことは、檜の

もっとも他人に知られたくない秘密である。これを、知っているぞとばかりのそぶりを洪皓がとったものであるから、檜が洪皓を嫌悪するようになったのも無理からぬところである。「先君述」には、『要録』に完顔昌としているところを粘罕としている。『要録』はこのところを「先君述」より引用したのであるが、粘罕では都合がわるいので完顔昌と改めたので、これは一見識である。『鶴林玉露』にも

忠宣（洪皓のこと）自虜歸。戲謂秦檜曰。撻辣（撻懶の異字訳）郎君致意。檜大恨之。とある。この時撻懶はもう死んでいるから、洪皓がこのようなことをいうわけではないが、洪皓が秦檜のために排斥をうけた事実を、すぐさま撻懶に結びつけるほど、秦檜と撻懶との関係は周知のことであったのであろう。秦檜は金国通として高宗に重視せられて宰相の地位をえたが、ちがった意味での金国通である洪皓は、金国通であることにかえって禍せられ、秦檜のために排斥せられたのであった。洪皓排斥は侍御史李文会によってなされた。

皓頃事朱勔之壻。夤縁改官。以該討論。乃求奉使。比其歸也。非能自脱。特以和議既定。例得放歸。而貪恋顯列。不求省母。若久在朝。必生事端。望与外任。（『要録』巻150, 紹興13・9 甲子条）

洪皓が朱勔の壻に請託したことが問題となり、その不評をうち消すために遣使を求めたということについてなききに一言したからここではしない。このごろ皓が帰国したのも、それはかれ自身脱歸したのではなく、講和成立によって一例に帰国をゆるされたのだというのは、秦檜が脱歸したことになっているのを強調したものである。皓が顯列を貪恋して、母を省ることを求めなかったというが、「先君述」には「力求郷郡養母、不許」とある。どちらが本当か判らない。しかし、とにかく、この李文会の弾劾によって、洪皓は知饒州に転出させられた。秦檜と李文会との間に、予め連絡のあったことは充分考えられる。中央におること三旬に満たないで外へ出されたわけである。饒州治はかれの本貫鄱陽県であった。

知饒州として赴任した翌年、大水があった。その時、中官の白鏐（韋太后に従って金から帰ってきた人物である）が、變理乖謬、洪皓のような人物を用いないからだという意味のことをいった。すると秦檜の党派では諫官詹大方が洪皓と白鏐とは刎頸の交りがあるので、互に訾めあっているのだ、として弾劾し、6月、洪皓を提挙江州太平觀に謫した。白鏐は実際は洪皓を知らないのだが、金国にも洪尚書の名が聞えているので、このようにいったのだという。しかしこれが、秦檜の派に乗ずべききっかけを与えたわけである。ところが8月、母の董氏がなくなったので、喪に服し、紹興17年（1147）、喪が終って提挙江州太平觀となったが、5月、また秦檜の党の余堯弼の讒言をうけ、濠州団練副使に貶され英州に流謫せられることとなった。英州は広東省呉徳県北にあたる。英州では法林寺の僧舎に住った。3男の洪邁がこれに随侍した。邁は紹興15年（1145）

博学宏詞科に合格し、この年25歳。英州に居ること9年。この地はかつてかれが抑留せられていた冷山の苦寒とちがって、暑熱の地であった。60歳を越えた洪皓は瘴疫になやまされ、そしてそののち紹興21年（1151）には風淫の疾を得た。中風のことである。この年、方滋が広南東路経略使になったが、この人は趙鼎、張浚、李光など、秦檜のために南方に流謫せられた人を庇護した人として知られるが、洪皓に対しても、礼を尽して待遇した。そして、この年、父のもとに趨侍した洪皓をその幕僚として迎え、父の身边に仕える便宜を与えた。23年（1153）には、洪适は馮氏の故宅を手に入れて父を住わせたのである。

紹興25年（1155）、英州謫居9年ののち、左朝奉郎・主台州崇道観とし、袁州居住を命ぜられた。袁州は江西省宜春県である。かれは英州をあとにして袁州に向ったが、まだ嶺北に越えないうちに病が重くなり、10月20日に南雄で没した。68歳である。その翌日、宰相秦檜が没しているのは、ふしぎなことである。秦檜がなくなると、高宗は洪皓がなくなったことを知らずかれの官を復することを命じ、訃報が到着すると、敷文閣直学士、ついで徽猷閣直学士に復した。忠宣と諡している。

7

15年に及ぶ金国抑留ののち、洪皓の経験したのは、南方の流謫生活であった。けっして恵まれた晩年とはいえない。しかし、かれは幸なことに、适・遵・邁という3人の優秀な子どもを始め、多くの児孫に恵まれていた。長男の适は、乾道1年（1165）賀生辰使として金の中都（今の北京）に赴いたが、この時の交渉によって、従来の歳貢を歳幣と改め、その額も銀帛各々25万を20万に減額し、君臣の関係になっていた金宋両国皇帝の関係を叔姪の関係に改めることに決定した。これは非常に成功であった。この年12月から翌年3月まで宰相（尚書右僕射）に拔擢せられている。次男の遵は資政殿学士に至り、3男邁は端明殿学士にまでなった。3人ともに卓越した教養人で、适には、南宋の金石学を代表する『隸釈』という著述があり、遵には古銭研究の先駆といわれる『泉志』があり、また邁にはかれの該博な知識を示す『容齋隨筆』と『夷堅志』とがある。これらの著作は、いずれも南宋文化の各部門を代表する業績として、それぞれ高い地位を認められている。このいわゆる三洪のほかには5男あり、女子は4人。洪皓の没した当時においてすでに孫の数は、男11人、女9人をかぞえた。その後、家門の繁栄は比類をみず、洪氏は南方の名族と称せられるに至った。この点、実子のなかった秦檜とは全く対蹠的である、洪皓の事蹟が比較的良好のっているのも、文筆にすぐれた3子の力に負うところが多い。皓が金国抑留中に見聞したところ綴った『松漠紀聞』は、長男の适がこれを板行し、次男の遵が補遺をつけたもの。当時の北満の事情を記したユニークな著述として重視せられている。